

「未来へつなぐ琉球・沖縄文化」

日時: 令和4年6月10日(金)・6月11日(土) 13:00～17:00

会場: 東京国立博物館 平成館大講堂

■6月10日(金)

第1講 13:10～14:10

「国宝に指定された尚家継承資料」

—— 休憩(20分) ——

第2講 14:30～15:40

「東京国立博物館の琉球コレクション」

—— 休憩(20分) ——

第3講 16:00～17:00

「沖縄県立博物館・美術館のコレクションと復元事業」

■6月11日(土)

基調講演 13:00～13:45

「首里城のこれから」

—— 休憩(20分) ——

第4講 14:05～15:50

「琉球・沖縄、最新研究」

—— 休憩(20分) ——

第5講 16:10～17:00

パネルディスカッション「首里城をめぐる歴史と文化の継承」



受講券について

受講券は、両日とも必ずお持ちいただき、ご入館・大講堂入場時にご提示ください。

連続講座「未来へつなぐ琉球・沖縄文化」

ごあいさつ

特別展『琉球』の開催にちなみ、沖縄から専門家の先生方をお招きして、リレー形式の講座を開催いたします。1日目は東京国立博物館、那覇市歴史博物館、沖縄県立博物館・美術館の各館が所蔵する貴重な琉球コレクションの意義について、2日目は琉球・沖縄に関する歴史、工芸の最新研究に迫ります。また基調講演としては、琉球史研究の第一人者である高良倉吉先生が、復興を目指す首里城についてお話をされます。

スケジュール

■6月10日(金)

13:00～13:10

ごあいさつ

三笠景子（東京国立博物館出版企画室主任研究員）

13:10～14:10

第1講「国宝に指定された尚家継承資料」

外間政明（那覇市市民文化部文化財課担当副参事）

——— 休憩（20分） ———

14:30～15:40

第2講「東京国立博物館の琉球コレクション」

14:30～15:05

①「明治17、18年購入の東博琉球コレクション」

品川欣也（東京国立博物館教育普及室長）

15:05～15:40

②「市河米庵コレクションの琉球関係資料」

六人部克典（東京国立博物館東洋室研究員）

——— 休憩（20分） ———

16:00～17:00

第3講「沖縄県立博物館・美術館のコレクションと復元事業」

與那嶺一子（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

■6月11日(土)

13:00～13:45

基調講演「首里城のこれから」

高良倉吉（琉球大学名誉教授）

—— 休憩（20 分） ——

14:05～15:50

第4講「琉球・沖縄、最新研究」

14:05～14:40

①「海東諸国紀と朝鮮国書—15世紀の琉球・朝鮮・日本—」

一瀬智（九州国立博物館展示課主任研究員）

14:40～15:15

②「琉球の宮廷文化」

猪熊兼樹（東京国立博物館特別展室長）

15:15～15:50

③「琉球の染織」

小山弓弦葉（東京国立博物館工芸室長）

—— 休憩（20 分） ——

16:10～17:00

第5講 パネルディスカッション「首里城をめぐる歴史と文化の継承」

司会：原田あゆみ（東京国立博物館企画課長）

パネリスト：高良倉吉、外間政明、與那嶺一子、猪熊兼樹、一瀬智、三笠景子

講師プロフィール

ごあいさつ

三笠景子（東京国立博物館出版企画室主任研究員）

専門は東洋陶磁史。

慶應義塾大学大学院修了後、2006 年より現職。陶磁器研究の道に進むきっかけは、卒業論文で沖縄県立博物館・美術館所蔵「沖縄県指定文化財 色絵梅竹文碗」を取り上げたこと。なぜ壺屋で白いやきものを焼いたのかについて考察を試みた。特別展『台北 国立故宮博物院 神品至宝』（2014 年）、『茶の湯』（2017 年）、『桃山 天下人の 100 年』（2020 年）などを担当した。主な著書（伊住禮次朗 共著）『利休のかたち 好み道具と「利休形」』（淡交社、2020 年）。

第 1 講「国宝に指定された尚家継承資料」

外間政明（那覇市市民文化部文化財課担当副参事）

専門は琉球史（近世・近代）。

那覇市歴史博物館主幹（学芸員）を経て、2022 年より現職。那覇市の歴史・文化、現代史に関する数多くの展示会を開催。主な著作・共著に、「尚家継承古文書の既存目録と評定所文書」（『尚家関係資料総合調査報告書』I、2003 年）、『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料の研究』（思文閣出版、2019 年）、『古地図で楽しむ首里・那覇』（風媒社、2022 年）。

第 2 講「東京国立博物館の琉球コレクション」

①「明治 17、18 年購入の東博琉球コレクション」

品川欣也（東京国立博物館教育普及室長）

専門は日本考古学。

1975 年青森県生まれ。自宅の近所から弥生時代の水田跡が発見されたことから考古学に関心をもち、明治大学、同大学院で日本考古学を学ぶ。明治大学文学部助手、同大耕地内遺跡調査団調査研究員をへて、2009 年より東京国立博物館に勤務。特別展『クレオパトラとエジプトの王妃』（2015 年）、『縄文』（2018 年）、『出雲と大和』（2020 年）などを担当。品川欣也ほか 2021「触れることのできる国宝の作成」『月刊文化財』 692。

②「市河米庵コレクションの琉球関係資料」

六人部克典（東京国立博物館東洋室研究員）

専門は中国書法史。

台東区立書道博物館専門員、東京国立博物館アソシエイトフェローを経て 2018 年より現職。

特別展「顔真卿 王羲之を超えた名筆」（2019 年）などに携わる。主な著書は「『小山林堂書画文房図録』—市河米庵の眼差し」『特集 江戸時代にもたらされた中国書画』（東京国立博物館、2021 年）、「高島槐安コレクションの中国書跡」『清朝書画コレクションの諸相—中村不折・高島槐安収集品を中心に—』（公益財団法人 台東区芸術文化財団、2021 年）、「元時代の文人書法」『没後 700 年 趙孟頫とその時代—復古と伝承—』（公益財団法人 台東区芸術文化財団、2022 年）など。

第 3 講「沖縄県立博物館・美術館のコレクションと復元事業」

與那嶺一子（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

専門は沖縄の染織。

昭和 59 年より沖縄県立博物館に勤務。代表的な著書は『沖縄染織王国へ』新潮社、2009 年。琉球大学教育学部卒業後、石垣市立石垣第二中学校に教諭として勤務。その後、沖縄県立博物館に学芸員として着任し、平成 15 年から平成 19 年には沖縄県立博物館新館建設のため沖縄県教育庁文化施設建設室に勤務した。平成 19 年から 20 年には糸満市立兼城中学校に教諭として勤務し、平成 20 年より県立博物館現職。

基調講演「首里城のこれから」

高良倉吉（琉球大学名誉教授）

専門は琉球史。

琉球大学教授を経て 2013 年より同大名誉教授。代表的な著書は『琉球の時代』（筑摩書房、1980 年）。1947 年沖縄県の伊是名島に生まれ、南大東島で育つ。国費沖縄学生として愛知教育大学を卒業。沖縄史料編集所（専門員）、沖縄県立博物館（主査）、浦添市立図書館（館長）を経て琉球大学で教鞭をとる。現在、首里城復元に向けた技術検討委員会委員長を務める。

第 4 講「琉球・沖縄、最新研究」

①「海東諸国紀と朝鮮国書—15 世紀の琉球・朝鮮・日本—」

一瀬智（九州国立博物館展示課主任研究員）

専門は日本近世史。

広島大学大学院修了後、福岡県教育庁文化財保護課、九州歴史資料館を経て 2014 年より現職。書跡・歴史資料をベースに、近年は日本とアジアの文化交流史を研究し、博物館活動や文化財保護に取り組む。特別展『戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—』（2015）、『王羲之と日本の書』（2017）、『室町将軍—戦乱と美の足利十五代—』（2019）など担当。

②「琉球の宮廷文化」

猪熊兼樹（東京国立博物館特別展室長）

専門は工芸史。

九州国立博物館研究員、東京国立博物館研究員、文化庁文化財調査官を経て 2019 年より現職。近年は、東アジア（日本、中国、韓国、ベトナム、琉球）の宮廷文化に関する研究を行なっている。主要著書『旧儀式図画帖にみる宮廷の年中行事』（東京国立博物館、2018 年）、『宮廷物質文化史』（中央公論美術出版、2017 年）、『有職文様』（至文堂、2008 年）、主要論文「フエ皇城世廟の九鼎の意匠」『東京国立博物館紀要』53 号（2018 年）、「清朝の礼制文化」『北京故宫博物院 200 選』（東京国立博物館、2012 年）、特集陳列『朝鮮王朝の宮廷文化』（東京国立博物館、2020 年）、『よみがえる宮廷』（東京国立博物館、2010 年）など。

③「琉球の染織」

小山弓弦葉（東京国立博物館工芸室長）

専門は日本東洋染織史。

お茶の水大学卒業、東京大学博士（文学）取得。奈良県立美術館学芸員、東京国立博物館研究員を経て、2019 年より現職。代表的な著書は『日本の美術 No.524 光琳模様』（ぎょうせい、2010 年）、『「辻が花」の誕生—〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』（東京大学出版会、2012 年）、『日本の伝統模様』全 3 巻（汐文社、2018 年）、『東京国立博物館セレクション 小袖』（東京国立博物館、2019 年）。最近の論文に「日本におけるタイ向け輸出用更紗に関する一試論」（『アジア仏教美術論集 東南アジア編』、中央公論美術出版、2018 年）、「染織の模様と文化」（『東アジア文化講座 4 東アジアの自然観』、文学通信、2021 年）など。

第 5 講 パネルディスカッション「首里城をめぐる歴史と文化の継承」

原田あゆみ（東京国立博物館企画課長）

専門は東南アジア古代彫刻史。

沖縄県立芸術大学大学院在籍時、文部科学省アジア諸国等派遣留学生としてタイ王国シラパコーン大学大学院にて東南アジア美術史を学ぶ。九州国立博物館設立準備室研究員、九州国立博物館研究員を経て、2022 年より現職。特別展『うるまちゅら島 琉球』（2006）、『タイ～仏の国の輝き～』（2017）など担当。近年の論文に「ドヴァーラヴァティーにおける法輪信仰と図像の展開」（『アジア仏教美術論集 東南アジア』中央公論美術出版、2019 年）、「更紗をめぐる交流史」（『館蔵名品展 更紗—生命の花咲く布—』（九州国立博物館、2019 年）など。

第1講「国宝に指定された尚家継承資料」

那覇市市民文化部文化財課担当副参事
外間 政明

1. 尚家とは

琉球王国の王家である尚家は、王統の違いから第一尚氏と第二尚氏の二つに区別される。第一尚氏は、沖縄本島南部佐敷出身の尚巴志が中山・南山・北山の三山を統一して打ち立てた王統で、7代60年余り続いた。その後を受けた第二尚氏は、伊是名島出身の尚円を初代とする王統で、19代400年余りに及び、1879年の明治政府による琉球処分まで存続した。この間、琉球は日本や中国、東南アジアの各国との間で中継貿易を展開し、東アジアの一大交易拠点となっていた。歴代の王は、中国明王朝(後に清王朝)へ朝貢し、中国皇帝から冊封を受け、琉球国中山王と称した。

①第一尚氏

初代 尚思紹(しょう ししょう:在位 1406~1421) → 2代 尚巴志(しょう はし:在位 1422~1439)
→ 3代 尚 忠(しょう ちゅう:在位 1440~1444) → 4代 尚思達(しょう したつ:在位 1445~1449)
→ 5代 尚金福(しょう きんぷく:在位 1450~1453) → 6代 尚泰久(しょう たいきゅう:在位 1454~1460)
→ 7代 尚 徳(しょう とく:在位 1461~1469)

②第二尚氏

初代 尚 円(しょう えん:在位 1470~1476) → 2代 尚宣威(しょう せんい:在位 1477)
→ 3代 尚 真(しょう しん:在位 1477~1526) → 4代 尚 清(しょう せい:在位 1527~1555)
→ 5代 尚 元(しょう げん:在位 1556~1572) → 6代 尚 永(しょう えい:在位 1573~1588)
→ 7代 尚 寧(しょう ねい:在位 1589~1620) → 8代 尚 豊(しょう ほう:在位 1621~1640)
→ 9代 尚 賢(しょう けん:在位 1641~1647) → 10代 尚 質(しょう しつ:在位 1648~1668)
→ 11代 尚 貞(しょう てい:在位 1669~1709) → 12代 尚 益(しょう えき:在位 1710~1712)
→ 13代 尚 敬(しょう けい:在位 1713~1751) → 14代 尚 穆(しょう ぼく:在位 1752~1794)
→ 15代 尚 温(しょう おん:在位 1795~1802) → 16代 尚 成(しょう せい:在位 1803)
→ 17代 尚 灝(しょう こう:在位 1804~1834) → 18代 尚 育(しょう いく:在位 1835~1847)
→ 19代 尚 泰(しょう たい:在位 1848~1879)

③近代尚家(侯爵家)

20代当主 尚 典(てん:生没年 1864~1920) → 21代当主 尚 昌(しょう:生没年 1888~1923)
→ 22代当主 尚 裕(ひろし:生没年 1918~1998)

2. 東京尚家邸と沖縄尚家邸

1868年に成立した明治政府は、琉球王国の日清両属体制を精算すべく、1872年に琉球藩を設置し、外務省、そして内務省の管轄においた後、1879年3月に琉球処分を断行し沖縄県を設置した。王国の象徴である首里城は明治政府に接收され、最後の国王となった第19代尚泰は、首里城から世継ぎの邸宅であった「中城御殿」へ移り、中城御殿が王家の住居となった。

琉球処分により東京居住を命じられた尚泰は、1879年5月27日に上京、その後、明治政府より従三位に叙せられ、麹町富士見町二丁目八番地(現:千代田区立九段中等教育学校敷地)の九段に邸宅を賜った。尚泰が移った中城御殿は、沖縄での尚家邸となり、明治政府より賜った九段の邸宅は、東京尚家邸となった。

富士見町の邸宅は1923年の関東大震災を機に、東京市(当時)に売却され、東京の尚家住居は渋谷区南平台に移るものの、昭和戦前期まで、尚家の邸宅は、東京と沖縄の2ヵ所であった。

3. 国宝に指定された尚家継承資料

1995年9月、尚家第22当主尚裕氏から尚家に伝わる古文書1,341点、翌年には美術工芸品85点が那覇市へ寄贈された。その後2006年6月に那覇市所蔵の尚家資料(文書・記録類1,166点、美術工芸品85点)が沖縄県で戦後初めて国宝(歴史資料部門)に指定された。さらに2017年7月、尚裕氏の長男衛氏より尚家文書約240点が那覇市へ寄贈された。この中に琉球王国時代の文書41点も含まれていたため、国宝への追加指定(2019年7月23日)となった。これら那覇市へ寄贈された尚家資料はすべて東京において保管されていたものである。

①尚家継承古文書

最後の国王尚泰の伝記編纂のために東京に取り寄せられた文書や明治政府と琉球藩の間で取り交わされた文書・記録類が中心。1,341点中、明治35年(尚泰の死後の翌年)を下限とした1,166点を指定。

②尚家継承美術工芸品

沖縄から東京へ送られた玉冠や王装束、刀剣、漆器、金工品など28点、紅型や絣などの衣装57点の計85点。現在のところ東京へ送られた経緯や目的は不明。

③追加寄贈文書

東京にて保管され、修理途中であった文書約240点。尚泰・尚典・尚昌・尚裕に授けられた位記や褒賞、大正・昭和期の日記などが中心。このうち41点が琉球王国時代の作成にかかる文書のことから、国宝へ追加指定された。

第 2 講「東京国立博物館の琉球コレクション」

明治 17、18 年購入の東博琉球コレクション

東京国立博物館教育普及室長
品川 欣也

1. 東博における琉球コレクションのはじまり

- ・明治 5 年(1872) 湯島聖堂博覧会(文部省博物館による日本最初の博覧会)
東京国立博物館の創立・開館
- ・明治 5 年(1872) 購入品 売上人不明(「江夏干城」の箱書)

2. 明治 17 年、18 年一括購入品がもつ魅力【資料 1】

* 当該品は現在、東博琉球コレクションの核となる絵画・歴史・工芸・民俗・動植物にわたる合計 227 件。一部は、大正 14 年(1925)に東京博物館(現国立科学博物館)などへの譲渡・移管。

- ・収集・購入の契機
プロイセン王国博物館人種学部(現ベルリン民族博物館)からの収集依頼
- ・収集年代
- ・収集方針
「古器旧物」とは異なる収集方針
- ・採集・製作地、製作者
- ・代価
当時の物価などを考える手がかり

参考文献

萩尾俊章・與那嶺一子・佐々木利和 1996「農商務省より独逸宛の沖縄関係物品目録について 上」『沖縄県立博物館紀要』第 22 号

萩尾俊章・與那嶺一子・佐々木利和 1997「農商務省より独逸宛の沖縄関係物品目録について 下」『沖縄県立博物館紀要』第 2 号

ヨーゼフ・クライナーほか 1992『世界に誇る・琉球王朝文化遺宝展』ドイツ-日本研究所

佐々木利和編 2002『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇』

〈封筒〉

独逸国代理公使 フライヘル、フォン、ツエトウキツ

西郷農商務卿閣下

〈手紙〉

琉球嶋之品物、人種学上ニ関係ノモノ王国（訳者按 普魯士）博物局中ニ相備申度、過日口上ヲ以テ相願候処、夫々、其筋へ御照会可被下旨、御許容被下奉謝候、即チ別紙人種学部ニ於テ希望致候物品目録進呈致候、尤モ、右ニ関セル費用之義ハ王国博物局ニ於テ相辨可申、此殿御承知可被下候、畢寛、我国博物館中、右諸物品相備候様相成候義ハ、閣下ノ御芳志ニ依ル所ニシテ、博物局力我公使ト共ニ深ク閣下ニ謝スル所ニ候、申迄ニモ無之候得共、別紙ニ記載致候品目ハ、博物局中、人種学部ニ従事スル学士研究家等カ採集セン事ヲ希望致候品類ノ要領ノミヲ相認タル義ニ在之候間、左様御承知被下度、且又、右諸物品之義、其出所使用ノ目的口他、可成詳細ニ記敍相成候様、御取計ラヒ被下度、此段併テ相願候、

敬白

千八百八十二年十二月五日 於東京

代理公使 フォン、ツエトウキツ

西郷農商務卿閣下

〈附録〉

第一

食物見本。調味物。飲物。麻醉剤。刺戟剤等、総テ貯蔵セラルベキ物品及ビ其調理器具。鍋釜ノ類。蒸籠。餐用器具。罐。皿鉢茶碗ノ類此他匙及ビ竹。椰子実。等ヲ以テ製シタル以上ノ代用品。水液貯蓄器。殻。葫蘆。鼻烟箱ノ如キモノ

途中省略

太古ノ有り様ヲ保持セルモノト思考セラルベキ石器。其他粗悪ナル珍器。及ビ起来ノ髑髏骨骼等ハ最モ関係ヲ帰スル所ナリ、人種学上ニ裨益アル物品ノ外、運搬ニ不便ナル物品ハ之ヲ謝絶ス、然レトモ家屋。車。船舶。等ノ模造。雛形。絵図。写真等ハ最モ切望スル所ナリ、博物館内ニ列品スベキ採集品ハ、其ノ名称。使用法。種類。出所等ヲ詳細ニ記セザルモノハ陳列スルヲ得ズ、

〈以下朱文〉

右目録中、衣服着用雛形、家屋模造雛形ノ類其他、採集シ難キ物品又ハ採集シ得ベキモノト雖トモ、運搬ニ不便ナル物品ハ撮影或ハ詳細ナル画図面ニテ代用スベシ、而テ、右撮影ハ成ベク紙幅大ナル方其形状ヲ蓋スベシ、但シ右撮影画図面ハ、該品ノ正面、側面、背面、此他形状ノ異ル部分ハ悉皆写シ取り可申事。

第2講「東京国立博物館の琉球コレクション」

市河米庵コレクションの琉球関係資料

東京国立博物館東洋室研究員

六人部 克典

1. 市河米庵の略歴

- ・名：三亥 字：孔陽・小春 号：米庵・米荈・楽斎・小山林堂など
- ・生没年：江戸時代・安永8～安政5年(1779～1858) 出身：江戸京橋桶町 墓所：長久山本行寺
- ・家族：父は儒者の市河寛斎(1749～1820)、弟は画家の鏑木雲潭(1782～1853)
- ・「幕末の三筆」に数えられる唐様書の大家。門下は全国に5600人を抱え、大名家にも書法を教授。書画文房等の文物を収集し、書に関する著作を多数編纂。招聘されて、43～72歳まで加賀藩に仕える。

2. 市河米庵の文物コレクションと関連著作

- ・『略可法』 市河米庵編、市河恭斎(名：三千)縮臨。1814年成書、1827年重編。全2冊。
→米庵が鑑賞もしくは収蔵した書跡、都合159件について形式ごとに分類して、各形式の書法を概説。
- ・『小山林堂書画文房図録』 市河米庵編、市河恭斎・市河遂庵(名：三胤)輯次。1846年成書、1848年刊。全10冊。
→米庵自選の文物コレクションカタログ。収蔵した文物(旧蔵品含む)から、書画141件、器物・文房具類121件について、図と考証を付す。末に米庵所蔵の扇面目録(都合240面)、山内香雪撰「明清書画扇面十二帖目次」を付録。

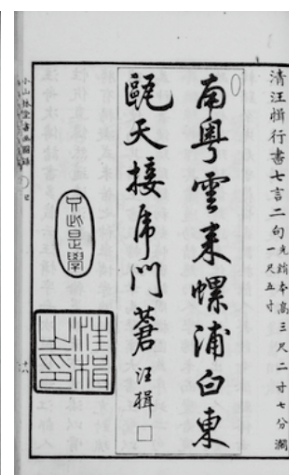
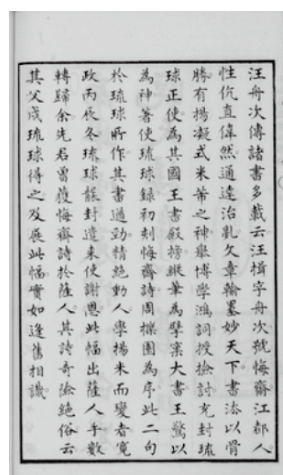
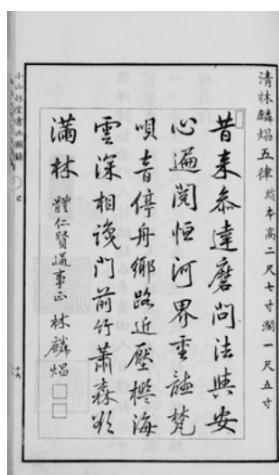
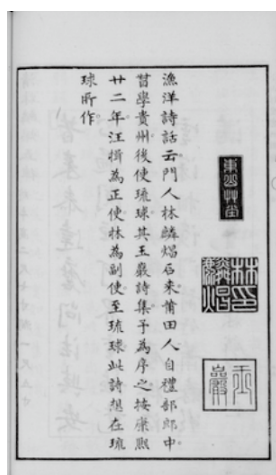
3. 東京国立博物館市河米庵コレクション(米庵旧蔵文物)の主な来歴

- ・文政5年(1822) 市河米庵が中国書画50種、同金石拓本50種などを昌平黌に「寄蔵」。
(のち書画金石拓本類は東京国立博物館、書籍類は内閣文庫に保管される)
- ・明治9年(1876) 市河三鼎(号：得庵)が家蔵の書画法帖150種を宮廷に献納。
- ・明治15年(1882) 上野の博物館の開館にともない移管か。
- ・明治33年(1900) 市河三兼(号：万庵)が所蔵品より逸品70点を選んで東京帝室博物館に寄贈。
- ・明治44年(1911) 市河三陽(号：泰庵)が所蔵品を東京帝室博物館に寄贈。
また、東京帝室博物館が市河三陽より所蔵品を購入。
- ・大正10年(1921) 東京帝室博物館が市河三陽より所蔵品を購入。

4. コレクション中の琉球関係資料

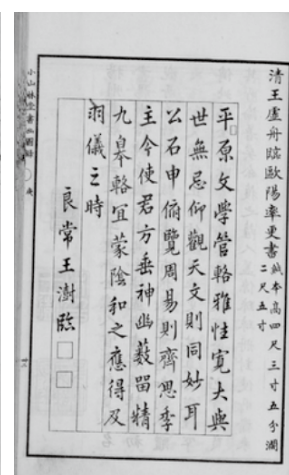
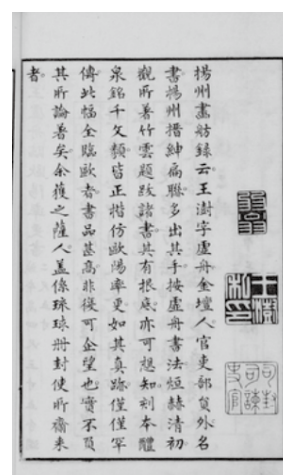
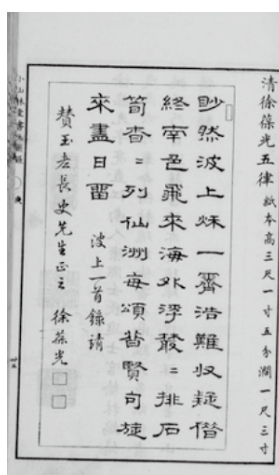
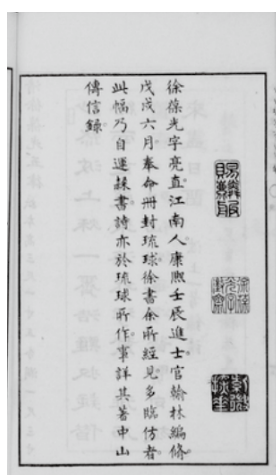
- ・使琉球冊封使の作：TB-18 汪楫筆「行書七言二句軸」*、TB-45 林麟焄筆「行草書五言律詩軸」*
TB-21 徐葆光筆「行草書五言律詩軸」*、TB-29 全魁筆「草書五言律詩軸」*
TB-24 周煌筆「行書七言律詩軸」*、TB-30 趙文楷筆「行書七言二句軸」
- ・その他関連作品：TB-17 王澐筆「臨歐陽詢書軸」、TA-6 陳元輔・続奎筆「行書七言律詩並山水図合装軸」
⇒『小山林堂書画文房図録』より、琉球・薩摩経由で江戸に将来された書跡を含むことが知られる。

※「*」は琉球展東京会場展示作品、「**」は同九州会場展示作品。



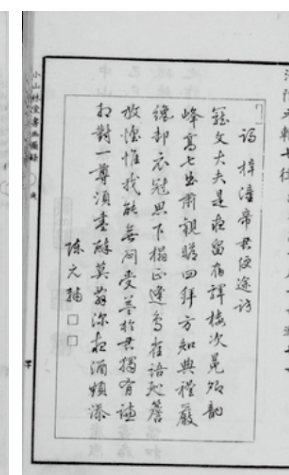
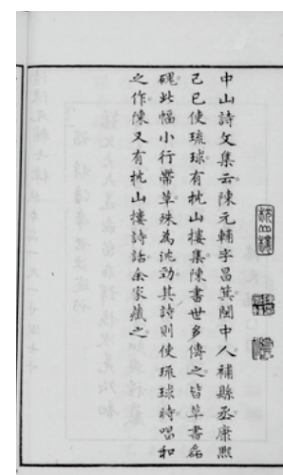
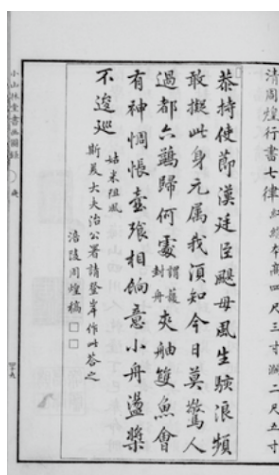
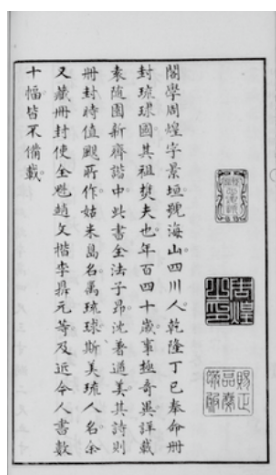
②清林麟焄五律（林麟焄筆「行草書五言律詩軸」）

①清汪楫行書七言二句（汪楫筆「行書七言二句軸」）



④清徐葆光五律

③清王虛舟臨歐陽率更書（王澐筆「臨歐陽詢書軸」）



⑥清周煌行書七律（周煌筆「行書七言律詩軸」）

⑤清陳元輔七律
（陳元輔・続奎筆「行書七言律詩並山水図合装軸」）

※（ ）内は、該当する東京国立博物館収蔵品

※図版典拠：東京国立博物館デジタルライブラリー URL：<https://webarchives.tnm.jp/dlib/>

①② 『小山林堂書画文房図録』己冊・清一 URL：<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/5347>

③④⑤⑥『小山林堂書画文房図録』庚冊・清二 URL：<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/5348>

第3講 「沖縄県立博物館・美術館のコレクションと復元事業」

沖縄県立博物館・美術館主任学芸員
與那嶺 一子

沖縄県立博物館・美術館は博物館と美術館の二つの組織があり、設立の経緯、収集と分類は全く異なる。

博物館は、1946年に開設した二つの博物館を前身として75年の歴史をもつ。沖縄の自然史（地学・動物・植物・菌類）、人類、考古、歴史、美術工芸、民俗についての収集と展示がある総合博物館である。

一方美術館は現代美術に特化しており、2007年11月、それまであった沖縄県立博物館と併設する形でスタートした。

第3講での、沖縄県立博物館・美術館のコレクションと復元事業は、博物館の話である。

博物館のコレクション

終戦後の1946年、沖縄には二つの博物館施設ができる。これが、後の琉球政府立博物館、沖縄県立博物館、沖縄県立博物館・美術館と続く、私どもの博物館の前身である。

一つは、米国海軍政府が設立した沖縄陳列館から始まった東恩納博物館である。沖縄の歴史や文化を米軍兵士に伝えることが初期の目的であった。もう一つは、首里市民による収集活動から誕生した首里市立郷土博物館である。

1953年、二つの博物館は合併し、1955年、琉球政府立博物館となる。1959年には、歴史・美術工芸中心のコレクションに民具が加わり、首里大中町への移転に伴い民俗室が開設。1975年からは自然史の岩石・貝類の標本類が増え、1982年の自然史室へとつながる。2007年、那覇市おもろまちへの新館移転に伴い、人類分野が加わった。博物館の収蔵品は2021年3月の時点で、100,490件。このコレクションを活用しながら総合博物館としての普及活動を行っている。

沖縄戦により、多くのものを失った沖縄でどのような収集活動が行われ、母体となるコレクションが形成されていったのだろうか。

当博物館の収蔵品原簿は沖縄民政府立首里博物館となった1947年から始まっており、その年の収蔵品（340件）の殆どは収集したものである。戦後、廃墟の中から運ばれてきた歴史・美術工芸の残欠がそれにあたる（旧円覚寺資料など）。1952年にはその収集活動範囲を県内の八重山へ広げ、1953年から、本土に向けての収集活動が始る。文化財収集キャラバンと呼ばれたこの活動により、多くの歴史・美術工芸資料が沖縄に戻ってくることになった。1953年には米国政府から「おもろさうし」などが返還されている。この収集活動には、戦前に沖縄を訪問した研究者、吏員、海外まで広がる沖縄県系人のネットワークが大きな力を発揮していた。第3講では、その戦後から復帰前までのコレクションの概要を、美術工芸、染織を中心にお話したい。

博物館が行ってきた復元事業

沖縄県立博物館・美術館は2015年度～2021年度までの7年間、近代化や戦災によって失われた相伝の美術工芸の手わざを現代に蘇らせ、世界に誇る沖縄の手わざの力を、モノを通して発信する、琉球王国文化遺産集積・再興事業を実施してきた。

事業の担当者達の視野にあったのは、科学的な調査による新たな知見を積み重ねること、手わざをどのように継承させてゆくかということ、そしてどう発信すれば伝えることができるのかということであった。2022年3月でこの事業は8分野の模造復元（65件）を完成させ、展覧会（7回）を実施して完了した。

戦後70年が経過し、様々な記憶が失われつつある状況で、少ない情報から復元事業導く困難は想定内のことであったが、監修者、製作者のご協力により思う以上の成果を得ることができた。しかし、課題が多く見つかったことも事実である。

染織分野は30件の復元を行った。これは復元事業の46%である。これには、沖縄の染織工芸と当館が戦後から行ってきた復元事業のあゆみと大きな関係がある。1952年、古作品を模造した7領の紅型作品（城間榮喜氏作）が購入されている。当時は色材、基布の調達が困難な時代であり、模様のみで復元である。復帰後の1976年、1977年には、日本民藝館の作品の模造製作が工芸関係者に依頼されている。幻であった花倉織や煮^{にーがしーばきー}縹芭蕉の技法復元など、この頃、復元という考え方は新たな領域に足を踏み入れたと言える。新垣幸子氏の日本民藝館所蔵品の復元、祝嶺恭子氏のドイツ、ベルリン国立民族学博物館の琉球コレクションの復元も新たな知見を得る機会となり、その後に大きな影響を与えた。

このような経験は本事業実施にあたり助け船であった。それによって、数多くの染織品の復元が可能となり、さらに若い人材へとつなぐこととなった。

1945年収容所から戻る人々の暮らしに文化運動の必要性を進言した先達の運動に始まる当博物館のあゆみと琉球王国文化遺産集積・再興事業はつながるものであり、そこからみえてきたものは、博物館が果たすべき地域と連携するという役割の重要性である。

基調講演

首里城のこれから

琉球大学名誉教授
高良 倉吉

琉球王国の拠点として長い歴史を歩んだ首里城は、1879年(明治12)の琉球併合＝沖縄県設置の後に、軍隊(熊本鎮台沖縄分遣隊)の駐屯所や各種の学校に転用されたため、老朽化が進んだ。中心的な建物である正殿は、昭和初期に沖縄神社拝殿という位置付けの下で解体修理が行われ、国宝建造物に指定された。だが、沖縄戦(1945年)において他の施設ともども破壊され、地上から姿を消した。戦後、跡地は琉球大学のキャンパスに転用された。やがて大学が移転することとなり、その跡地を国営公園として整備する事業が1980年代後半から始まった。

戦争で失われた沖縄神社拝殿を参考としつつも、正殿の復元は、王国時代の「かたち」を甦らすことになった。つまり、誰も目にすることがない正殿の姿を現代に登場させることを目指したのである。

その作業を可能にしたのは、王国時代に記された2件の正殿の修理記録だった。1768年竣工の記録(「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」と、1846年竣工の記録(「百浦添御普請絵図帳」他3冊、尚家文書)がそれであり、建築様式や彫刻、塗装、彩色、装飾などに関する詳細な情報を伝えている。この2件の記録に基づいて正殿は甦り、1992年11月から一般公開された。そして、その後も休むことなく城内の他の施設の復元も続けられ、2019年2月に事業は終了した。

ところが、事業が終了したその年の10月31日未明に、正殿1階の北側から発生した火災により、正殿とその周辺の建物を含む主要施設は灰燼に帰してしまった。平成時代に甦った首里城は、27年後に失われたのである。さらに、城内に展示されていた文物や、収蔵庫に保管されていた美術工芸品の多くも大きなダメージを被った。

国営公園としての首里城の再建を目指す作業は、日本政府によって直ちに開始された。沖縄県は、県内外から寄せられた多額の寄付金を用いて、木材や瓦などの資材を正殿の復元事業に提供する取り組みを進めている。つまり、令和の復元は、国と県が連携する形で推進されている。

目下進められている正殿を例に復元の状況を説明すると、中心的な課題が二つ横たわっている。一つは防災・防火対策であり、二つは新しい資料や知見に基づく見直し作業である。

そのために、沖縄総合事務局(政府の内閣府に所属)に設置された「首里城復元に向けた技術検討委員会」を中心に、「防災」、「木材・瓦類」、「彩色・彫刻」、「北殿・南殿等」の四つのワーキンググループ会議と、機動的に開催される作業チーム会合において詳細な検討が行われている。

これらの委員会や会議・会合で検討されている目標は、2度と火災のダメージを被らない首里城をどう実現できるかであり、同時にまた、焼失した首里城よりも更にバージョンアップした時代考証の成果をどう反映できるかである。この二つの目標を矛盾なく達成すること、それが令和復元の基本コンセプトだと言えることができる。

また、令和復元のプロセスを多くの人びとと共有することも重視されている。

前回の平成復元の際には、巨大な素屋根（仮施設）に覆われた内部で、正殿の復元は進められた。木材を組み立てる作業や屋根瓦を葺く作業、そして建物の各所に施される塗装や彩色などの作業は非公開であった。すべての復元作業が終了し、素屋根が撤去された瞬間に、誰も見たことがない正殿の「かたち」がデビューしたのであった。

今回の令和復元の場合は、焼失後の痛々しい現場の公開からスタートし、工事に向けた準備作業を見学できる取り組みが進められている。復元事業の手順を説明する解説パネルが設置されており、運び込まれた木材の集積や加工の状況、組み立て工事の状況ばかりではなく、屋根瓦を葺く作業や塗装・彩色の作業など、工事の進捗状況の全体を見学できることになっている。つまり、再び甦る首里城正殿のプロセスを、多くの人びとと共有することを目指している。

沖縄県のほうは、正殿 2 階に掲げられていた 3 枚の扁額（「御筆扁額」）の復元を平行して進めている。中国皇帝が琉球国王に贈った書（「御筆」）を、琉球の技術で製作したものである。さらに県は、次の国王になる王子（中城王子）の屋敷であった中城御殿についても、復元・整備に向けた取り組みを始めている。

また、首里城公園を管理・運営する沖縄美ら島財団は、火災によりダメージを被った美術工芸品の修復作業をすでに始めている。

火災による焼失によって、首里城への関心は高まった。1 日も早い復元を望む人びとの声に励まされつつ、令和の復元事業は、目標に向かって着々と進められている。

第4講「琉球・沖縄、最新研究」

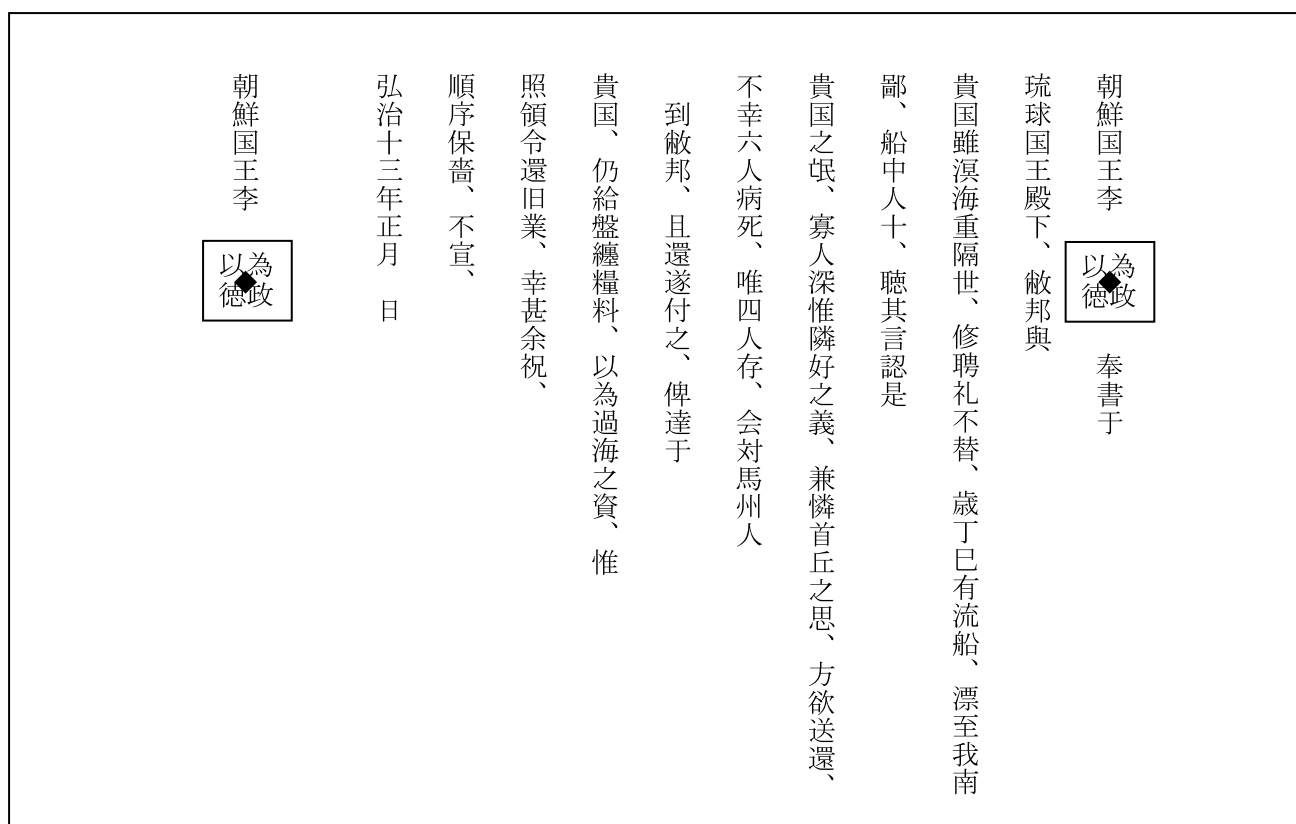
海東諸国紀と朝鮮国書—15世紀の琉球・朝鮮・日本—

九州国立博物館展示課主任研究員
一瀬 智

朝鮮国書 重要文化財

紙本墨書 縦 58.1 cm × 横 118.4 cm

朝鮮時代・弘治13年(1500) 宮崎・都城島津邸所蔵

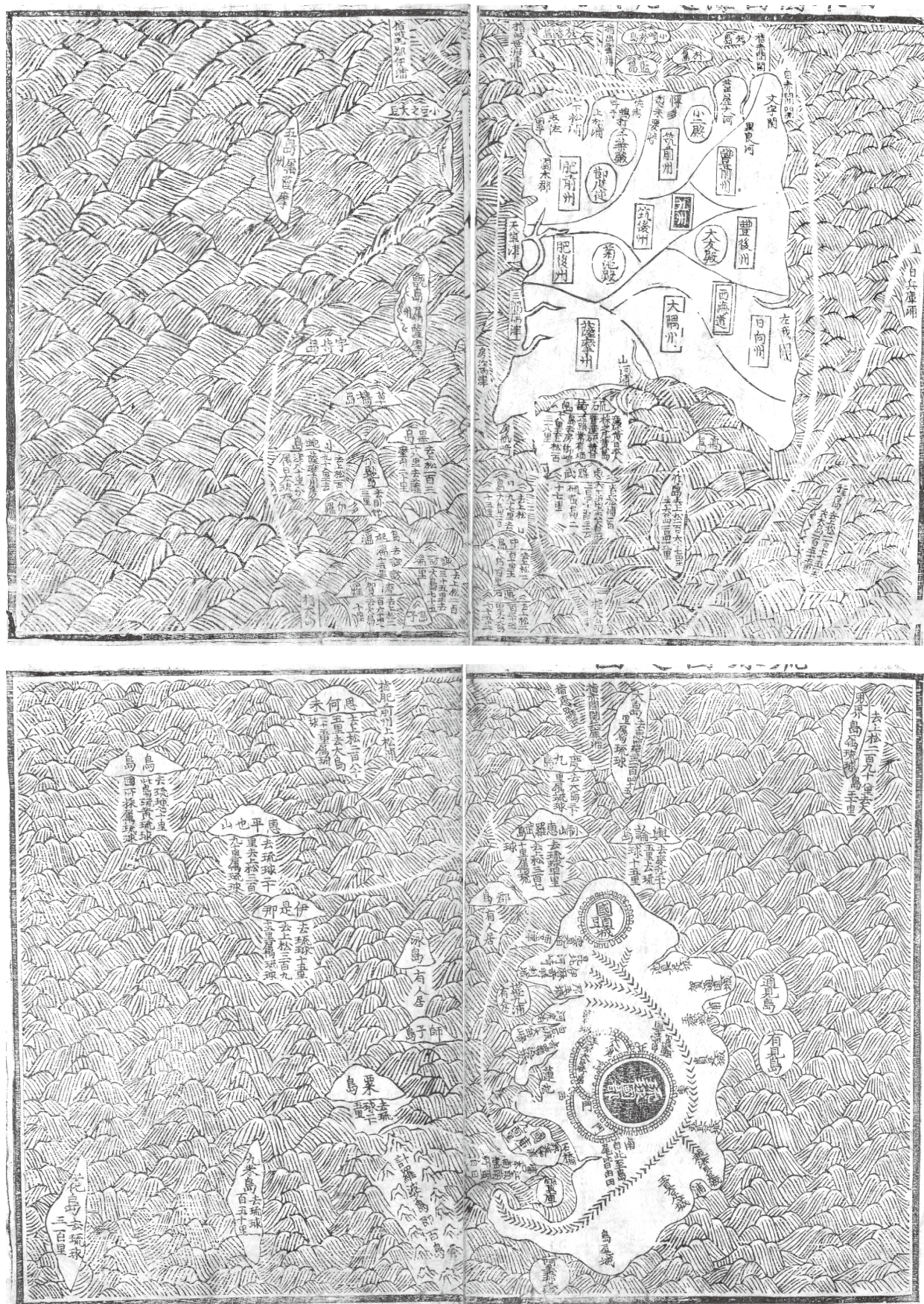


◆は「卣」に「隆」

海東諸国紀

申淑舟編 紙本墨刷・袋綴装 縦 32.6 cm × 横 21.2 cm

朝鮮時代・1471年編、1512年頃刊 東京大学史料編纂所所蔵



『海東諸国紀』（東京大学史料編纂所蔵）を改変

第4講「琉球・沖縄、最新研究」

琉球の宮廷文化

東京国立博物館特別展室長
猪熊 兼樹

【東アジアの宮廷】

朝廷： 東アジアの普遍的な政治体制

宮廷： 朝廷の具現化

【琉球の宮廷（首里城）】

外廷： 国家の公式空間

正殿に前庭が付く（ただし正殿は西面する） ※龍柱など

北殿（行政施設。冊封使の歓待）、南風御殿（薩摩の在番奉行の応接）

内廷： 君主の私的空間

御内原〔うちばる〕 ※美御前御揃など

聖域： 御嶽〔うたき〕祭祀

首里森御嶽〔すいむいうたき〕、京の内 ※京の内出土品など

宗廟： 祖先崇拜

円覚寺 ※仁王像残欠など

【玉座（御差床〔うさすか〕）】

一階： 下庫理〔しちやぐい〕王が政務や儀式を行なう空間

二階： 大庫理〔うふぐい〕王や女官が祭祀を行なう空間

【冠服制】大朝・大礼 ※小朝・小礼には朝冠・雑色衣

国王： 玉冠、唐御衣裳（皮弁冠・皮弁服） ※別に常服がある。

一品： 金簪、彩織緞帽、錦帯、緞色袍

二品： 金簪、紫綾帽、黄帯、深青色袍（八、九品まで同じ朝服）

三品： 銀簪、黄綾帽、龍蟠黄帯

四品： 簪、帽、袍は三品と同じ。龍蟠紅帯

五品： 簪、帽、袍は三品と同じ。雑色花帯

六、七品： 簪、袍は三品と同じ。黄絹帽。帯は五品に同じ。

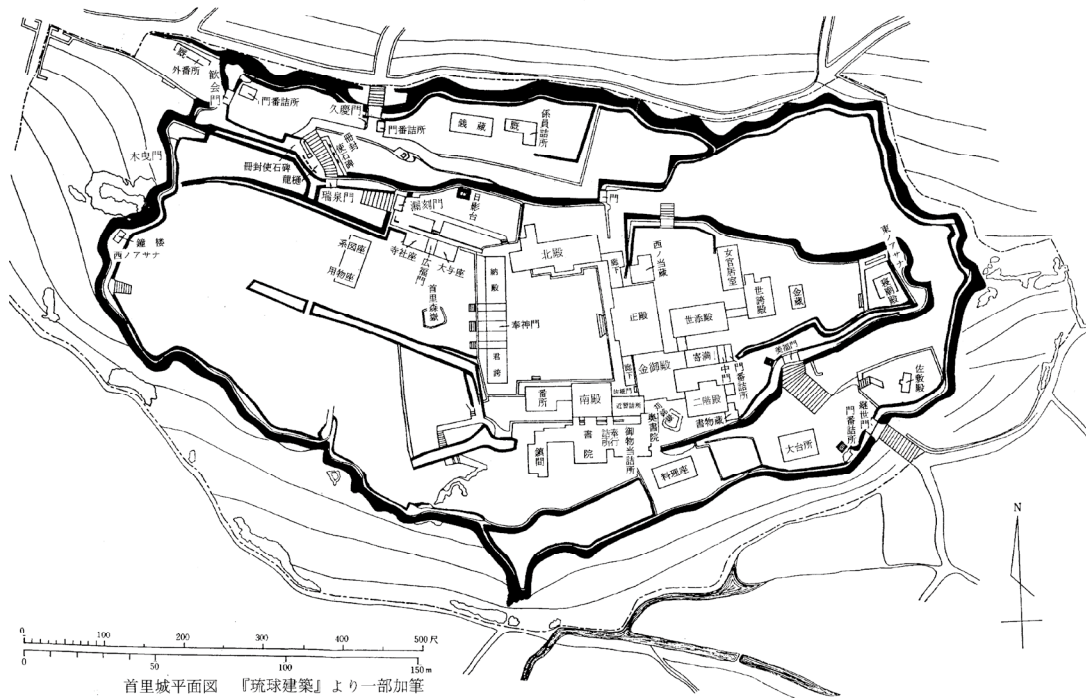
八、九品： 簪、袍は三品と同じ。大紅縹紗帽。帯は五品に同じ。

里、保長： 銅簪、藍袍、紅布帽あるいは緑布帽。

蔭、官生： 簪、帽、服、帯ともに八品に同じ。

百姓頭目： 青布帽

【首里城】



(『首里城入門』 1997 年より)

【琉球冠制】

青冠	赤冠	黄冠	紫冠	浮織冠 うきおりかん
最下級の者。 位階にのぼる前の位。	下級官僚の位。「里 之子」筑登之の肩 書を持つ者。	中・高級官僚の位。 「親雲上」の肩書を持 つ者。	高級官僚の位。「親方」 の肩書きを持つ者。	国王に次ぐ位を示す。 王子・主弟・按司など

(『首里城ハンドブック』 1998 年より)

第4講「琉球・沖縄、最新研究」

琉球の染織

東京国立博物館工芸室長
小山 弓弦葉

遺された琉球コレクション

沖縄の伝統工芸の中でも、染織は沖縄独特の自然環境と歴史的・文化的位置の中で育まれた風土色あふれる素材・技法・意匠を持つ。特に本土では紅型が知られるが、実は織物にこそ独自性は際立っている。芭蕉布は言うまでもなく、首里織物（手縞・綾ヌナーカー・花織・花倉織・ロートン織・煮総芭蕉など）、地方性豊かな花織や手花（読谷山・知花・与那国など）、久米島紬、宮古上布、八重山上布、そして現在では全くその製法が伝わっていないことから「幻の布」と言われている桐板がある。

これら沖縄の伝統染織の多くは琉球王国時代、首里王府の統治下で士族や王族の衣装として発展してきた。沖縄戦を経てこれらの琉球染織は一時衰退の危機を迎えたが、遺された人々の記憶と努力によって復活を遂げた。日本の伝統染織が後継者不足によって衰微していく中で、沖縄においては若い世代を中心に製作と研究の両面にわたって続いてきた。復活を遂げた理由の一つには、沖縄戦以前に琉球の染織を蒐集し遺されたコレクションから得られた情報が重要であった。本展では以下のコレクションの一部を紹介している。

1. 琉球国王尚家関係資料（那覇市歴史博物館 図録№60～66、80～103）
2. 福地家コレクション（那覇市歴史博物館 図録№218、219）
3. 鎌倉芳太郎コレクション（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館ほか 図録№230、232、234）
4. 日本民藝館コレクション（東京・日本民藝館 図録№293、294、295、319）
5. 岡田三郎助コレクション（松坂屋コレクション J.フロントリテイリング史料館 図録№220、343、344）
6. 長尾美術館コレクション（旧鐘紡コレクション 東京・女子美術大学美術館 図録№227、238）

琉球の染織－その素材・技法・文様

① 紅型に見る日本、中国との関わり

琉球の染織の中でもっとも知られる紅型は、型紙を用いて糊を置いた部分を染まらないようにし、陽光に映える鮮やかな色彩を刷毛で挿して文様を染める技法である。実にさまざまな用途と表現を持った型紙を用い、多様な表現を生み出してきた。鎖大模様型で表現される絵画的な模様や隈取りといった刷毛使い、日本で生まれた染の文様と同じ文様が用いられることから、本土の研究者によって友禅染の影響を強く受けていると指摘されてきた。また、繰り返される文様の構成が共通することから、能装束（唐織）の影響を強く受けているという指摘もなされてきた。

しかし、沖縄の研究者や作家たちの研究によって、近年では異なる視点も生まれつつある。隈取りと称される暈しの表現は、単仕立て両面染をするという紅型の特性を考えた際、むしろ、琉球絵画におけ

る裏彩色の技法に似ると指摘される。紅型のデザインを宮廷の画家が担っていたことを考慮すると一理あろう。また、紅型には本土の自然を反映した文様が多いといわれるが、実際には中国の文様の影響も色濃く見られる。日本との関連で見逃せない友禅染との共通点をあげるとすれば、それは18世紀に入って頻繁に使用されるようになった生臘脂の使用だろう。紅型と友禅染は、共に赤紫に臘脂、黄に石黄（藤黄）、青に藍蠟を用いるという共通点があり、興味深い。

独特の型紙使いや色使いを考慮しても、紅型は本土の型染とは別の発展を遂げたと考えるべきである。その源流をめぐる研究が進展を見せている。古琉球紅型「浦添型」の研究と実証成果である。「蒟蒻型」とも呼ばれてきたその技法は、琉球に自生していたヤマゴンニャクを粉末状にしたものを水で溶き、胡粉や桐油を混ぜた蒟蒻糊を接着剤として金箔を塗り、蒟蒻糊に墨などの色料を入れて型紙で摺り込む技法である。一方、沖縄の研究者は浦添型の技法が中国から入ってきたと考えているが、実は、日本においても、同様に木型や型紙を用い、顔料に糊と油を混ぜて小紋を染める技法が17世紀頃から見られる。

② 織物に見る琉球、中国、日本との関わり

琉球王国は、日本以上に中国や東南アジアとの文化交流が長く、深い。例えば、本展で展示された『弘治帝勅諭』（図録No.30）には、明帝が琉球国王と王妃に下賜したものに、錦や苧麻の糸、紗や羅といった薄物の織物などが含まれていた。このような朝貢の儀は清朝にも続いていたことが、尚家に伝わる唐衣裳一式（図録No.60～66）や中国の織物で仕立てられた衣裳（図録No.80～86）からもうかがえる。一方『大明会典』には琉球が明国に進貢した物の中に「生熟夏布」という記述があり、これが芭蕉布と考えられている。芭蕉布は、本来は琉球の蒸し暑い気候をしのぐために織られた織物であるが、現代の素朴な「民藝」という印象とは異なり、絹のような柔らかさを持つ芭蕉布（図録No.285、343、344）や煮纒と称される華やかな色彩の芭蕉布（図録No.99、100）が織られており、芭蕉布にもその用途によって様々なヴァリエーションが見られた。

また、現代ではその生産が途絶え素材や製法が分からないことから「幻の織物」と呼ばれている「桐板」も、中国・福建省から輸入された植物繊維の糸を琉球の人々が紺糸に染めて夏の衣料として織っていたものである。現在では福建省でも生産されていないことから未だ謎の多い布であるが、近年の研究によりその素材は竜舌蘭や苧麻などの説がある。

琉球独特の織物として代表的なものにロートンや花織といった浮織物や手花と称される縫取織が挙げられるが、これらの織物もまた東南アジアの織物の影響が強い。『歴代宝案』成化六年（一四七〇）の項には琉球から朝鮮に贈った物の中に「棋子花異色手幅二条 彩色糸手幅二条 綿布染手幅二条」と記され、これが花織や手花、染物で模様を施した手巾だと考えられる。また、成化十六年（一四八〇）に暹羅国から琉球に送られた物の中にも「手幅織花糸黄布一条」という記述が見られ、織物を通じた交流がうかがえ興味深い。

おわりに－これからの琉球染織研究

琉球の染織における独自性とその国際交流を見ていくと、従来の本土の研究者による見解に近年の沖縄における研究を照合していく必要性が感じられる。琉球文化の魅力は、南アジアや東南アジアから中国・朝鮮を経て、日本に至る様々な国の文化が融合する点にある。まさに琉球文化研究は、沖縄、日本、中国、東南アジアにおけるそれぞれの研究者が互いの文化を比較研究する時代を迎えつつある。

第5講 パネルディスカッション

「首里城をめぐる歴史と文化の継承」

■司会

原田あゆみ（東京国立博物館企画課長）

■パネリスト

高良倉吉（琉球大学名誉教授）

外間政明（那覇市市民文化部文化財課担当副参事）

與那嶺一子（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

猪熊兼樹（東京国立博物館特別展室長）

一瀬智（九州国立博物館展示課主任研究員）

三笠景子（東京国立博物館出版企画室主任研究員）

■ディスカッションテーマ

1 首里城とはどのような空間だったのか。

・首里城は王府の政治・儀礼・外交がおこなわれる空間（公的な場）であるとともに、国王をはじめとする王族の居住空間（私的な場）でもある。

・首里城は 500 年にわたり琉球の中核施設であり、歴史上の様々な事象との深いかかわりをもち、ここを中心に琉球の「王朝文化」は花開いた。琉球古来の美意識とは？

2 首里と那覇の関係とネットワーク

・王都・首里に対して、那覇は港町として発達し、冊封使節を迎える天使館や薩摩の役所等があった。また泊港を擁する泊村や中国からの渡来人の子孫が住む久米村も那覇に隣接。首里は琉球王国の政治・外交・宗教の拠点として、王国内の各間切や久米島・宮古・八重山等の離島地域等とネットワークを形成していた。

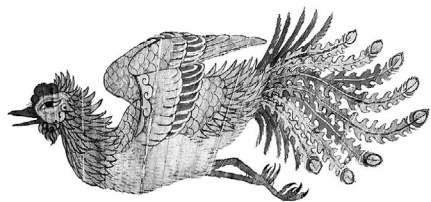
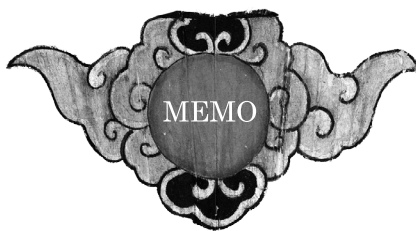
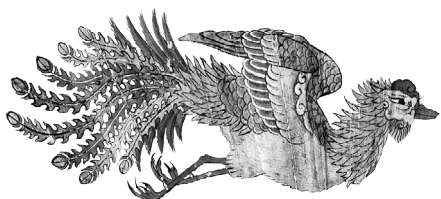
3 平成の復元と令和の復元

・平成の復元にこめられた思いとは？

失われた文化遺産の回復、新たな沖縄文化の創出、伝統技術の継承と発展、歴史的風土探訪の場の形成。

・令和の復元にこめる思いとは？

首里城に由来する歴史・文化・思いの継承。未来へつなぐ場の形成。

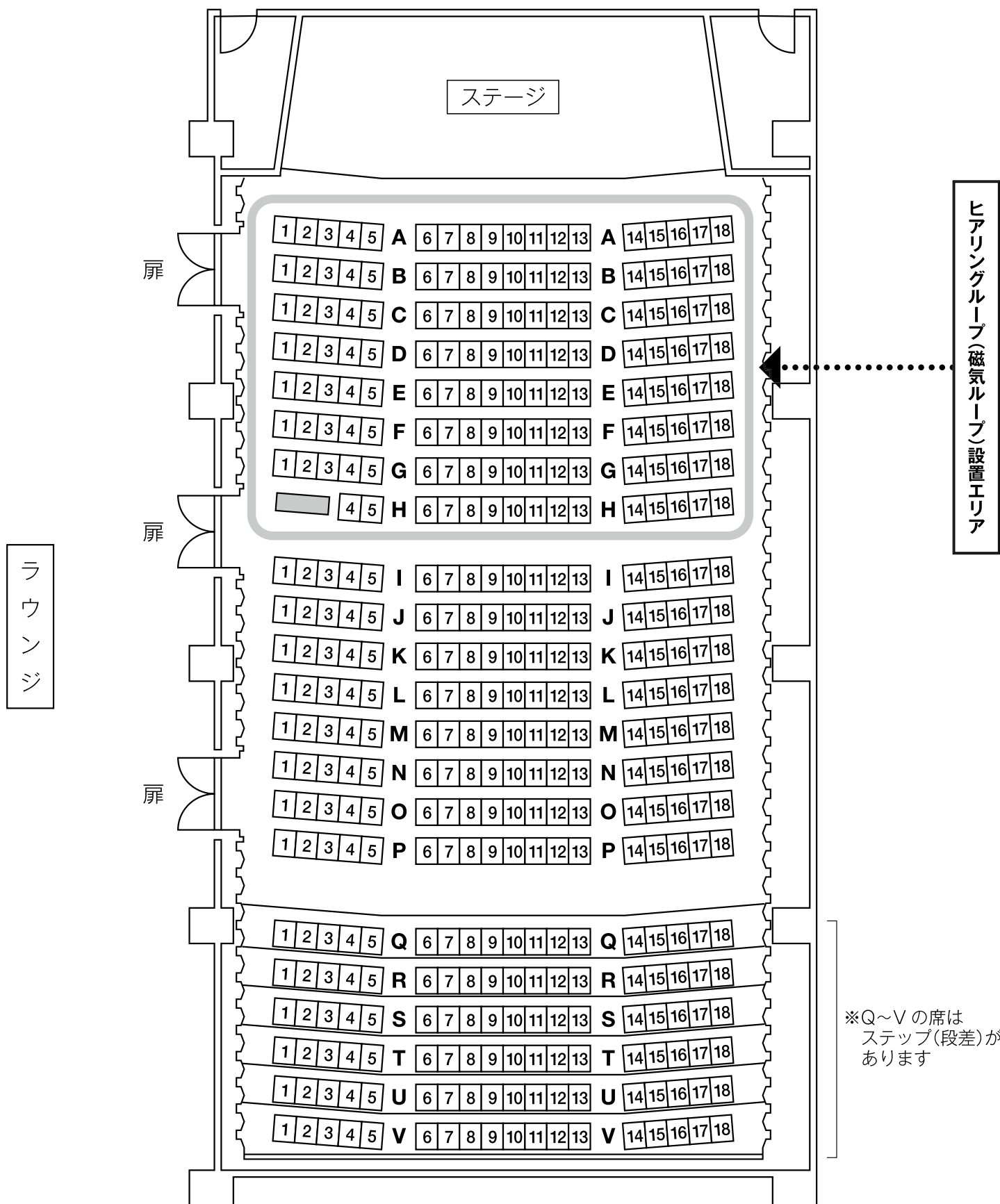


令和 4 度 東京国立博物館 連続講座
「未来へつなぐ琉球・沖縄文化」

発行日：令和 4 年 6 月 10 日
編集・発行：東京国立博物館
印刷：大協印刷株式会社

*本書の全部または一部を著者の許可なく転載・複製することを禁じます

平成館大講堂 座席表



車いすスペース ※要事前連絡